



## 六 ああ、海水浴？

サブザックに水着と着替えを入れる。準備万端だ。これまで、山ばかり登っていたので、海に行くのは、なんだか嬉しい。そう言えば、海で泳ぐなんて小学生の時以来だ。確か、ドッジボールの大会で、女木島に行った時に、試合が終わった後、仲間と泳いだのだった。泳いだと言っても、本格的に泳いだ訳じゃなく、海の中で、水の掛け合いやプロレスごっこをした程度だ。それでも十分楽しかった。

今日の海での練習は、日ごろから、山や階段、坂道でハードな練習をしているので、息抜きで、荒木先輩が気遣ってくれたのだろう。顔はゴリラでも、心は天使なんだ。それに、荒木先輩だけじゃなく、中山先輩も一緒に行くと言っていた。海に行くのだから、当然、水着になるのだろう。普段から、ランシャツ・ランパン姿は見慣れていて、スタイルが良いことはわかっている。けれど、水着姿はまた違う。やっぱり、ピンクの水着なのかな。それに、ビキニだろうか。まさか、スクール水着じゃないよな。直人は少し鼻の下を伸ばした。「待てよ。小学生の頃に買ったビーチバレや一浮輪がまだあったはずだ」

直人は部屋の押し入れに息継ぎもせずに潜り込む。

「あった。あった」くしゃくしゃに折り畳まれたビーチボールと浮輪の皺を伸ばす。ひよっと穴が空いていたらいけないので、試しにふくらましてみる。大丈夫だ。空気を抜き、きれいに折りたたむと、荷物の量が増えたので、着替えなどをサブザックからスポーツバッグに入れ替える。よし。直人はまだ海で浮輪をつけてもいないのに、浮き浮きした気持ちでベッドに潜り込んだ。

「ちわー」ここはJR高松駅の花時計前。海水浴の待ち合わせ場所だ。直人が到着した時、既に、荒木先輩と中山先輩が待っていた。

「これで、全員ですか」

「いや。あと一人、いや二人かな」と荒木先輩が答える間もなく、ハアハアハアと荒い息使いで、クマが現れた。山田先輩だ。これから海に行くというのに、もう体中汗だくだ。あだ名のとおり、全身毛だらけだから、汗かきなのか。

「やあ。すまん。すまん。少し遅れたかな」山田先輩は汗で鼻から口まですべり落ちた黒ぶち眼鏡を両手で元の位置に戻した。

「大丈夫だ。まだ、もう一人来ていない」

「もう一人って誰ですか？」直人は入部してから四か月が過ぎようとしているが、このクロススポーツ部は何人もの人がやってくるので、正確な部員の数はいらない。ただし、常に練習しているのが、荒木先輩と中山先輩で、たまに山の中で会うのが山田先輩だ。

「心配しなくても、もう来ているぞ」

そこには、顧問のタヌキならぬ、岡田先生が、子ダヌキならぬ、小学生の子どもを二人連れていた。子ダヌキたちは、既に、浮輪を腰に付け、ビーチボールを持っていた。海水浴気分百二十パーセントだ。

「子どもが海に行きたがってなあ。荒木、一緒に連れて行ってもいいか」

「いいですよ。どうせ俺たちは、松林の中や砂浜なんかを走りますから」

「ああ。助かる。それじゃあ、全員揃ったようだから、出発するか」

タヌキたちが先頭で進んでいく。次に、ゴリラ、クマ、ひまわり、最後が直人だ。まるで、動物園の遠足のようなのだ。

「あの子どもたち、岡田先生のお孫さんですか？」直人は前を歩く中山先輩に尋ねた。

「孫じゃないわよ。お子さんよ。小学生よ。先生の奥さんも教師だから、忙しいみたい。大会や遠征にも、時々連れて来ているわ」

「ええっ。お子さんですか？」直人は驚いた。そう言えば、子どもの顔は岡田先生に瓜、いやタヌキ二つだ。同じDNAには間違いない。だけど、初めて、岡田先生に会った時、五十歳は遙かに過ぎ、定年前の年齢だと勝手に思い込んでいた。顔つきがタヌキだったせいかもしれない。何しろ、タヌキは化けるのが上手いからだ。子どもが小学生ならば、岡田先生は四十歳代だろう。

小学生や中学生の頃、教師の年齢なんか、気にすることはなかった。それは、自分のことが精一杯で、教師たちの生活の部分が見えなかったからだ。今、こうして、岡田先生の子どもたちも見ると、当たり前のことだが、先生も親なんだと思う。よし。今日は、先生の子どもたちと一緒に遊んであげよう。直人は練習じゃなく海水浴気分に入った。

「着いたぞ」荒木先輩が座席から立ち上がった。

「わーい」岡田先生の子どもたちが電車の扉の前に立つ。既に海水浴モード百パーセントだ。直人もその後ろに立つ。ドアが開いた。子どもたちは飛び出す。直人も飛び出す。

「どっち？」子どもたちは駅の前で首を左右に動かしている。

「あっちだ」直人は松林が見える方向を指差した。子どもたちは松林に向かって走り出す。直人も負けずに走り出そうとした。

「こら。直人。どこへ行くんだ」荒木先輩の怒鳴り声がした。

「子どもたちと一緒に海で泳ぐんです」大声に直人の脚が止まる。

「俺たちは練習だ。ここへは遊びに来たんじゃないぞ」

「ええ？海水浴に来たんじゃないんですか？」直人は振り返る。その顔の眉毛は八の字になった。

「誰が海水浴に行くと言った。海水浴場は砂浜があって、走ると脚を取られるので、足腰の鍛錬にいいんだ。それに、砂浜を裸足で走ったり、歩いたりすると健康にもいいんだ。そのために海水浴場に来たんだ。さあ、行くぞ。まずは松林で練習だ」荒木先輩を先頭に山田先輩、中山先輩が続く。

「じゃあ、俺はここで。昼食の時にでも会おう」岡田先生は子どもたちの後を追って、砂浜の方に向かう。

「よろしく願います」三先輩が岡田先生にあいさつをした。直人は首がうなだれ、肩を落としたまま、先輩の後をとぼとぼと着いて行った。

「はあははあ」直人は盛り上がった松の木の根っこにしゃがみ込んだ。座るのにちょうどいい高さだ。それに地面に座ってしまうと、二度と立ち上がれない気がしたからだ。息が荒い分だけ、口の中が乾燥する。喉が渴いた。ペットボトルを手に取る。喉を垂直に上げ、スポーツドリンクを口の中に流し込む。広大な砂漠の中に水を蒔いたかのように、いくら水を飲んでも飲み足りない。荒木先輩や山田先輩は息を整えるためか、座らずに歩いている。中山先輩は座り込んではいないものの、体をくの字に曲げ、腰に手をつけている。

直人たちは、タヌキ親子の海水浴組から別れると、早速、松林の中を走り出した。ランニングコースは、最初はアスファルト道だが、途中から松林の土道に変わり、海水浴を楽しんでいる親子連れなどを横目に見ながら砂浜を横断し、再び、やっと、砂浜を抜けると、松林の中に飛び込み、再び、アスファルト道に出る。走行距離約二キロ。この周回コースを何周も走り続けた。最初のうちは、回数を覚えていたが、そのうちに、頭の中は砂色になり、記憶があやふやになっていく。それでも、先輩たちは走るのをやめない。そのうちに、直人は先輩たちの背中が見えなくなり、見えない後ろ姿を追ううちに、今度は、先輩たちの荒い息が聞こえてきた。周回遅れた。「直人、ラスト一周だ」荒木先輩が直人を追い抜きは、ゴールした。

「はい」直人は、休憩している先輩たちを横目に見ながら、後一周、後一周と口の中で呟きながら走る。もう、コースなんて見ていない。今の辛さから逃れるために、目を瞑って走る。そして、ようやくゴールしたのだった。

「さあ。行くぞ」荒木先輩はスタート地点の方へ早くも歩き出した。

「ええっ。もう行くんですか？」直人はまだ松の木に根っこにしゃがみこんだままだ。そのまま固まって、松の木の一部と化している。

「早く走れば、それだけ長く休憩できるんだ。次は砂浜だ」岡田先輩も中山先輩も続く。直人だけが一人取り残されるわけにはいかない。それに、さっき、荒木先輩は砂浜に行くぞと言った。ようやく、海水浴ができるのかもしれない。水着は履いていない。まあ、いい。このまま飛び込めばいいんだ。でも、中山先輩はどうするんだろう。ランシャツ、ランパンの下は水着なのだろうか。余計なことを想像してしまう。でも、内心、なんだか嬉しい。

「待ってください。すぐに行きますよ」直人は妄想を断ち切ると、お尻についた松の葉も振り払わずに、慌てて立ち上がると、先輩たちの後ろ姿を追った。

「ぜえ。ぜえ。ぜえ」さっきよりも、息が荒い。それに、足が上がらない。足は蹴れない。蹴っても前に進まない。

今、直人たちは、海の浅瀬を走っている。直人の海水浴の夢は波が岩にぶち当たったかのようにもろくも砕け散った。

「今から、波打ち際を走るぞ。それも、裸足でだ」の荒木先輩の掛け声で、四人は走り出したのだった。砂浜では、家族連れや地元の小学生や中学生たち、同年代と思われる高校生たちが海遊びに興じている。その横を走る直人たちの体は汗と飛び跳ねる海水でびしょよりだ。喉が渴く。口唇を舐める。しょっぱい。これは汗なのか、海水なのか。青春なのか。わからない。今、どちらでもよい。何でもよい。

「がんばって」誰かが声を掛けてくれた。その声が直人の横に着いて走る。岡田先生のお子さんたちだ。その姿を見てか、他の海水浴に来ていた子どもたちも、直人の後ろに続いて走る。子どもたちは足で海を踏むと、水しぶきが上がるのが面白いらしい。

「海花火、海花火」と騒いでいる。その声を聞くと、直人の疲れも少しは和らぎ、元気が出る。

「海花火、海花火」直人はやけくそ気味で、足を海に叩きつける。

「もう。そろそろ休憩にしたらどうだビーチパラソルの下に座っていた岡田先生が立ち上がり、海に近づいて来た。

「よし。休憩。お疲れさん」荒木先輩がその声を聞いて、急に立ち止まった。

「えっ」バツシャン。子どもたちに気を取られていた直人は立ち止まらずに、そのままつんのめって頭から海の中に倒れ込んだ。大きな人型の海花火が打ち上がった。